

昔から伝わる祭り

— おん祭と身近な祭りの見えない共通点 —

奈良市立都跡小学校 山方貴順

(1) 単元名

昔から伝わる祭り — おん祭と身近な祭りの見えない共通点 —

(2) 単元の目標

○おん祭と都跡ふれあいまつりの概要や、2つの祭りに込められた人々の願い、保存・継承するための工夫や努力について理解できるとともに、2つの祭りについて調べることができる。

(知識・技能)

○おん祭と都跡ふれあいまつりについて、学習問題や学習計画を考え表現できるとともに、2つの祭りに込められた人々の願い、保存・継承するための工夫や努力を考え、適切に表現することができる。

(思考・判断・表現)

○おん祭と都跡ふれあいまつりに関心を持ち、2つの祭りに込められた人々の願い、保存・継承するための工夫や努力について意欲的に調べるとともに、自らも祭りを受け継ぐ一員であるとして考えることができる。

(主体的に学習に取り組む態度)

(3) 単元について

・教材観

奈良市には、おん祭と呼ばれる奈良を代表する祭りが存在する。春日大社の「若宮様」という神様に喜んでいただくことで、五穀豊穡や万民安楽を祈り、大和一国を挙げて盛大に行われてきた祭りである。飢饉や疫病がはやっていた1136年に始まり、それ以降一度たりとも途切れることなく続いている。おん祭に関連する行事は7月に始まり、12月まで続く。その中で最も多くの観光客が訪れるのは、毎年12月17日に行われる「お渡り式」である。この日は、奈良市内ほぼ全ての小中学校で、午前中2時間程度しか授業は行われない。これは、児童生徒がお渡り式を見学に行けるようにという配慮である。以前は、奈良市役所の業務も午前中に終わり、職員の多くがお渡し式を見に行ったり、参加したりしたそうである。お渡り式は元来、芸能集団や祭礼に加わる人々が、お旅所におられる「若宮様」の元へ集ったのが始まりだと言われているが、現在も「お渡り式」は盛大に行われ、当時の衣装を着た人々や、馬までもが奈良の町をねり歩く。また、おん祭は1979年に国の重要無形民俗文化財に指定され、それと同時に、おん祭保存会が設立された。保存会では祭礼の装束、用具の整備、廃れた儀式の復興等を担当している。

一方、本校では、毎年9月第4土曜日に「都跡ふれあい祭り」という祭りが行われている。この祭りの第1回開催は2010年と、歴史の浅い祭りである。この祭りの運営に中心的な役割を担っておられる都跡自治連合会会長の藤田氏によると、この祭りに、「安心・安全なまちにしたい。そのため、この祭りで仲良くなってもらったり、コミュニケーションをとってもらったりして、信頼関係を築いてほしい」という願いを込めておられることが分かった。また、同氏は「もっと参加者を増

やしたい。そのために、祭りの出店数を増やしたい。今年から再度、地域の業者を入れた。第8回も、さらに出店を増やす予定でいる。」という今後の展望も語っておられた。

2つの祭りは、歴史や神事の有無、規模等、違いは大きい。しかし、共通点もある。それは、祭りの保存・継承に尽力している人は、自分だけではなく、地域や日本全体の生活がより良くなることを願っていることである。おん祭では五穀豊穡や万民安楽、都跡ふれあいまつりでは安心・安全なまちづくりのための信頼関係の構築といったことが、それにあたる。また、保存・継承するために、工夫や努力をしている点も共通点といえる。

・ 児童観

おん祭に行ったことのある児童は 11 名である一方で、都跡ふれあい祭りには全員が行ったことがあると答えていた。都跡ふれあい祭りに行く理由を尋ねたところ、「楽しいから」が最多で 24 名、以下「おいしいものを食べることができるから」が 10 名、「景品をもらえるから」が 8 名、「友達と会えるから」が 6 名と続いた。教職員が作る焼きそばがあることや、子ども園に通う弟妹の発表を見ることを理由に挙げる児童もいた。運営者側が願っている「地域がより良くなってほしいから」ということを理由に挙げていた児童はいなかった。

・ 指導観

本小単元の学習は、祭りに詳しい、いわゆる「祭り博士」になることを児童に求めてしまいがちである。当然、おん祭や、地域の祭りのことを学ぶことは避けては通れない。しかし、現行の学習指導要領や、次期学習指導要領にはそれぞれ、次のように書かれている（下線筆者）。

【現行】

- ・ 民俗芸能などの文化財が地域の歴史を伝えるとともに、そこにはそれらの保存に取り組んでいる人々の努力が見られることや、地域の人々が楽しみにしている祭りなどの年中行事には地域の生産活動や町の発展、人々のまとまりなどへの願いが見られることなどを取り上げ、生活の安定と工場に対する地域の人々の願いや保存・継承するための努力や工夫を考えることができるようにすることが大切である。
- ・ これらの学習を通して、地域の人々の願いを考えることができるようにする。

【次期】

- ・ 県内の文化財や年中行事の様子を捉え、人々の願いや努力を考え、表現することを通して、県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたことや、それらには地域の発展など人々の様々な願いが込められていることを理解できるようにすることである。
- ・ 県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたことを理解することとは、自分たちの住む県内の様々な場所で文化財や年中行事が受け継がれていること、それらは地域の歴史を伝えるものであることなどを基に、県内の伝統や文化について理解することである。また、それら（県内の文化財や年中行事）には地域の発展など人々の様々な願いが込められていることを理解することとは、文化財や年中行事にはそれらの保存や継承に取り組んでいる地域の人々の努力が見られることや、地域の生産活動やまちの発展、人々のまとまりなどへの願いが込められていることを基に、県内の伝統や文化について理解することである。
- ・ 歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取組などに着目して、県内の文化財や年中行事の様子を捉え、人々の願いや努力を考え、表現することとは、社会的事象の見方・考え方を働かせ、県内の文化財や年中行事について、例えば、いつ頃、どのような理由で始まったか、どのような経過で現在に至っているか、人々は保存や継承のためにどのような取組をし

ているかなどの問いを設けて調べたり、それらを人々の願いや努力と関連付けて考えたりして、調べたことや考えたことを表現することである。歴史的背景に着目するとは、文化財がつくられたり始められたりした時期や保存されてきた理由、年中行事のおこりや成り立ちなどについて調べることである。現在に至る経過に着目するとは、文化財や年中行事が生まれ出されてから現在に至るまでの経過について調べることである。保存や継承のための取組に着目するとは、文化財や年中行事を大切に保存したり受け継いだりしている人々の工夫や努力について調べることである。このようにして調べたことを手掛かりに、県内の文化財や年中行事の様子を捉えることができるようにする。人々の願いや努力を考え、表現するとは、例えば、文化財や年中行事を保存したり受け継いだりしている人々の工夫や努力と地域の人々の願いを関連付け、文化財や年中行事を受け継ぎ保存していることの意味を考え、文章で記述したり、年表などにまとめたことを基に説明したりすることである。

以上のことから、祭り自体の知識・理解も重要であるが、それに終始することなく、受け継いでいる人々の願いや、保存・継承するための工夫や努力を扱うことが求められていることが分かる。では、どのようにすれば、それらに児童は気付くことができるのであろうか。そのためには、次に記す2点が重要であると考え、実践を行うようにした。

まず1点目は、2つの祭りを比較する、ということである。教科書や、奈良市の副読本では、取り上げている祭りの事例は1つのみである。しかし事例が1つだけでは、児童は「この祭りは、たまたま、そうなんだ」「自分からは少し遠い祭りだ」と思ってしまうのではないだろうか。そこで、2つの祭り、それも1つは児童にとって最も身近に感じることのできる祭りを取り上げることで、「2つとも同じだ」「自分が毎年行っていた祭りにも、願いが込められているんだ」という祭りへの見方・考え方を持つことができると考える。

2点目は、受け継いでいる人の話を生で聞く、ということである。経験則によるところであるが、小学3年生という、読めない漢字も多く、語彙量の少ないこの段階においては、社会科や総合に関して、書籍は有効な資料となりづらい。彼らにとっては、やはり、「本物」に触れることが良い学びになると考える。本実践では、おん祭に関しては、春日大社から北野氏を、都跡ふれあいまつりに関して都跡地区自治連合会会長の藤田氏を、ゲストティーチャーとして招き、祭り自体の知識・理解に留まらず、特に祭りに込めた願いや、保存・継承するための工夫や努力に重点を置いて話してもらうことにした。

2つの祭りを比較する際、まず相違点を考えさせることから始めたい。祭り自体の知識・理解を想起させるためである。祭りが始められたきっかけや、歴史の長短、神事の有無、観光客数や祭りの規模等の違いをより一層際立たせるためである。こうすることで、神事であるおん祭と、地域コミュニティのための都跡ふれあいまつり、2つの祭りの性質の違いが浮き彫りになってくる。

祭りを実施する目的や、運営者側の祭りに込めた願い、保存・継承するための工夫や努力に気付いていない本学級の児童の実態からも、本単元を実施する意義は、地域の一員として大きいと考えられる。

・ESDの観点

おん祭をESD教材化する際の特徴はどこにあるのか。一番は、1136年から一度も途切れることなく続いていること、それも、五穀豊穰や万民安楽という多くの人々が幸せに暮らすことを願って、という点であると考えている。

おん祭は、存続の危機に陥ったことがあった。17世紀の興福寺が大和国の支配的な地位を失い、経済的に独力では祭礼を支えることが困難になった時期と、明治維新の廃仏毀釈の風潮の中、興福

寺が力を失った時期である。2つの危機とも、力を失ったのは興福寺である。しかし、おん祭の主催は、春日大社である。なぜ、興福寺の衰退が、おん祭の危機と関係があるのだろうか。それは、春日大社と興福寺が藤原氏の氏神、氏寺であったことに起因する。春日大社は、興福寺と一体のものとして捉えられていたのである。前者の危機は、幕府が奈良奉行所に命ずる形で、人的・物的資源を注入したことで、興福寺を中心とする中世以来の祭礼の形式を守ることができたのである。後者は、多くの行事やそれにまつわる仕来りや貴重な用具や調度品が失われはしたものの、地元の人々の援助によって、乗り越えることができた。工夫や努力することで2つの危機から脱却できたことから分かるように、多くの人々がおん祭に願いを込めていることが分かる。

一方、都跡ふれあいまつりをESD教材化する際の特徴はどこにあるのか。これは、地域コミュニティの結束や、自治連合会という立場からの「街づくり」を目標としていることといった、願いをもって、祭りを運営している点であろう。まだ歴史が浅く、存続の危機はないそうだが、実行委員会を重ねたり、前日や早朝から祭りの準備をしたりと、多くの工夫や努力を伴っている。

この2つの祭りの共通点を考えさせる授業を、小単元の後半に取り入れたい。そのことで、児童に次のことを気付かせたい。それは、教材観でも記したが、自分だけではない、地域や日本全体の生活がより良くなることを願って、努力して祭りを受け継いでいる、ということである。児童は祭りのことを「楽しいから行く」「おいしいものを食べに行く」といった表面的なところしか見えていないが、そうではない、人の願いが込められている点に気付かせたい。

また、おん祭と地域の祭りを比較する授業は、祭りを継承するという世代間の公正、自分以外の幸せを願う世代内の公正、2つの公正をねらうことのできる教材であると考え。それに加え、構成概念の多様性、公平性、責任性をも包含している教材といえよう。祭りには様々な種類があるが、願いが込められている点、保存・継承のために工夫や努力がなされているという点は同様であるという多様性、先述した2つの公正から公平性、自分も祭りを次世代へ繋いでいく一員であるという責任性である。祭りや年中行事に関する学習は、ESDの学習の好例といえる。

(4) 評価規準

ア、知識・技能	イ、思考・判断・表現	ウ、主体的に取り組む態度
①おん祭と都跡ふれあいまつりの概要について理解している。 ②2つの祭りに込められた人々の願い、保存・継承するための工夫や努力について理解している。 ③2つの祭りについて、必要な情報について調べている。	①おん祭や都跡ふれあいまつりについて、学習問題や学習計画を考え、適切に表現している。 ②2つの祭りに込められた地域の人々の願い、保存・継承するための工夫や努力を考え、適切に表現している。	①おん祭や都跡ふれあいまつりに関心を持ち、それらの概要や、保存・継承するための取り組みについて意欲的に調べている。 ②祭りに込められた人々の願いや、保存・継承するための工夫や努力について自分も祭りを受け継ぐ一員であるとして考えている。

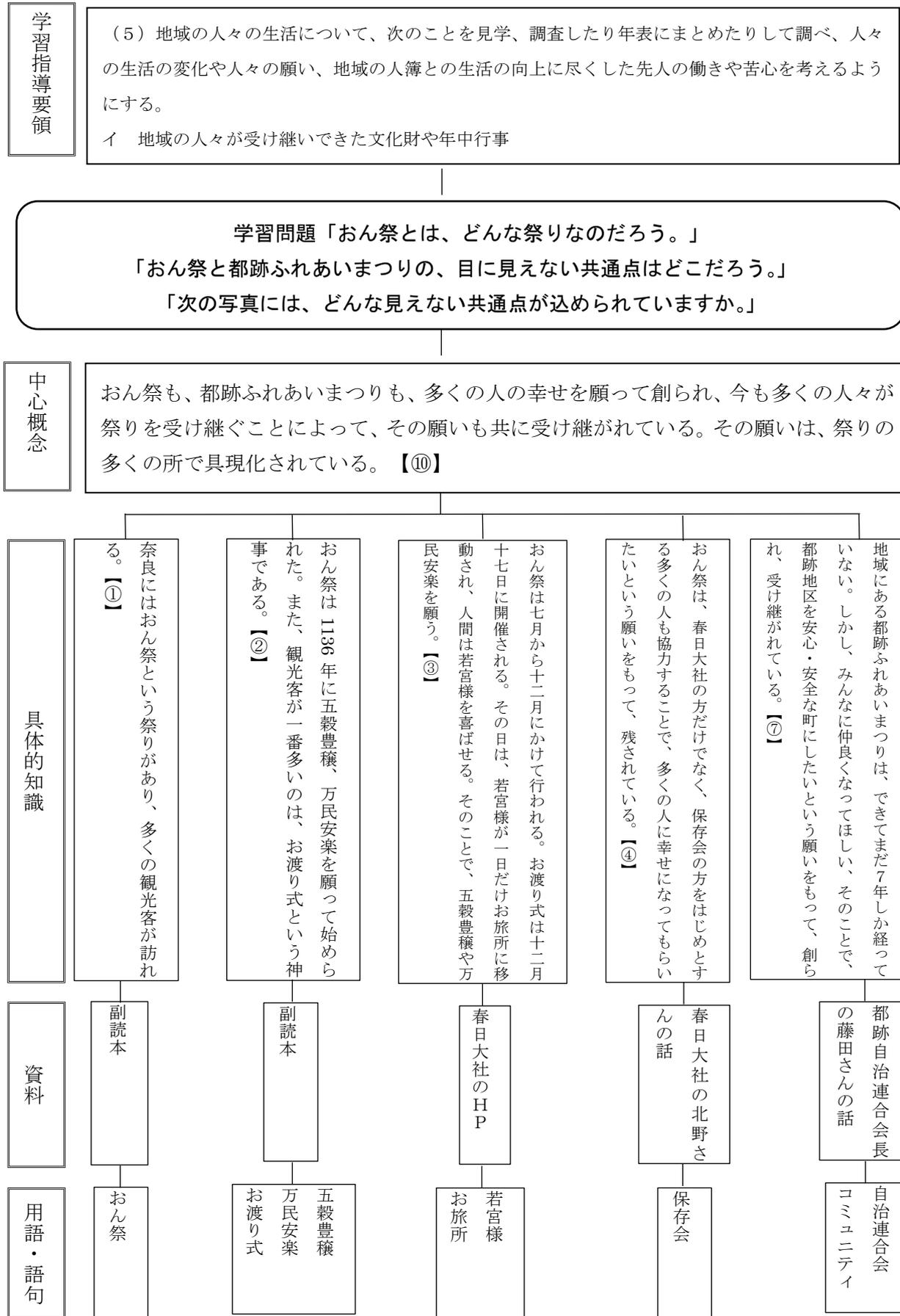
(5) 単元展開の概要 (全 11 時間)

時	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている祭りについて話し合う。 ・奈良市で一番大きな祭は何かを考えさせる。 ・おん祭について、調べたいことを挙げ、学習問題をつくる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; text-align: center;">おん祭とは、どんな祭りなのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・学習計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に話し合わせ、祭りに対して関心を持てるようにする。 ・写真を提示し、興味が向きやすくする。 <ul style="list-style-type: none"> ・まずは、副読本を使って調べ、それでも分からないものについては、春日大社からゲストティーチャーを招くようにする。 	<p style="text-align: center;">イ①</p> <p style="text-align: center;">イ①</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の調べたいことの中から、右の3点を、副読本を使って調べる。 ・おん祭の理解にはまだまだ不十分であることに気付かせ、次時のホームページで調べることや、春日大社からゲストティーチャーに尋ねたいことを考える。 	<p>①いつ始まったのか。：1136年</p> <p>②なぜ始まったのか。：五穀豊穰、万民安楽</p> <p>③神事の種類：お渡り式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次のことが考えられる。 <ul style="list-style-type: none"> ・どんな思いで受け継いでいるのか。 ・どんな苦労があるのか。 ・存続の危機はあったのか。それは、どのようにして乗り越えたのか。 	<p style="text-align: center;">ア①</p> <p style="text-align: center;">ア③</p> <p style="text-align: center;">ウ①</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> ・春日大社のホームページより、おん祭について右記のことを調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何月から何月までやっているのか。 →7月から12月まで。 ・お渡り式がある12月17日は、どんなことがあるのか。 →午前0時に遷幸の儀、正午にお渡り式が開始、午後11時に還幸の儀 ・お旅所とは何か。 →若宮様が、12月17日、年に1回訪れる所。 ・おん祭は何のためにしているのか。 →若宮様に喜んでいただくことで、五穀豊穰、万民安楽を願っている。 	<p style="text-align: center;">ア①</p> <p style="text-align: center;">ア③</p> <p style="text-align: center;">ウ①</p>
4	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャー（春日大社の北野氏）の話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭を保存・継承するための努力や工夫。 ・おん祭には、人々の様々な願いが込められていること。 	<p style="text-align: center;">ア②</p> <p style="text-align: center;">ア③</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭保存のために、どのようなことをされているか。 ・おん祭の存続の危機、そして、その乗り越え方。 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭についてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習問題である「おん祭とは、どんな祭りなのだろう」の解決の場であることを伝える。 ・以下の観点を設定し、5点の中から3～4点記述するように指導する。 <ul style="list-style-type: none"> ①おん祭の新発見 ②おん祭が始まった理由 ③おん祭に込められた人々の願い ④おん祭を残している方の思い ⑤おん祭を受け継いでいくための工夫や努力 	イ②
6	<ul style="list-style-type: none"> ・自分達にとって最も身近な祭りは何かを考え、その祭りについて学習する計画を立てる。 ・可能な点については、家庭で調べてくるように伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭について学んだ内容を、身近な都跡ふれあいまつりに置き換えて学習する計画を立てる。 <ul style="list-style-type: none"> 【祭りに関すること】いつ始まったのか、なぜ始まったのか、どんなことをしているのか等 【願いに関すること】運営に関する努力や工夫、祭りに込められた願い 等 	イ①
7	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャー（都跡自治連合会長の藤田氏）の話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に挙げたことについても、話していただくようにする。 	ア① ア② ア③ ウ①
8	<ul style="list-style-type: none"> ・都跡ふれあいまつりについてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第5時と同様である以下の観点を設定し、5点の中から3～4点記述するように指導する。 <ul style="list-style-type: none"> ①都跡ふれあいまつりの新発見 ②都跡ふれあいまつりが始まった理由 ③都跡ふれあいまつりに込められた人々の願い ④都跡ふれあいまつりを残している方の思い ⑤都跡ふれあいまつり受け継いでいくための工夫や努力 	イ②
9	<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭と都跡ふれあいまつりの、相違点について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までにまとめたものをもとに考えさせる。 ・次のものが考えられる。 <ul style="list-style-type: none"> 祭りが始められたきっかけ・歴史の長短・神事の有無・観光客数・祭りの規模等 	ア①

<p>10</p>	<p>・おん祭と都跡ふれあいまつりの、目に見えない共通点について話し合う。</p> <p>・都跡ふれあいまつりとおん祭の写真を見て、どんな「見えない共通点」が込められているか話し合う。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>おん祭と都跡ふれあいまつりの、目に見えない共通点は何だろう、</p> </div> <p>【祭りの存続・発展に関する意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祭りが続いてほしい ・参加者が増えてほしい ・参加者を楽しませる ・店を出している 等 <p>【祭りが始められた理由に関する意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分以外も幸せになってほしい ・年中行事 ・良い世の中になってほしい 等 <p>【前者2つを達成するための努力や工夫に関する意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会議や打ち合わせをしている ・準備をしている 等 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>次の写真の中には、どんな見えない共通点が込められていますか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・普段何気なく目にしていると考えられる、次の4点の資料を提示する。 ①動画・蘭陵王 ②動画・野太刀 ③写真・テント立て ④写真・露店 ・これら全てに、「祭りの存続・発展に関する思いや願い」「祭りが始められた理由に関する思いや願い」「前者2つを達成するための努力や工夫」が込められており、それらは目に見える形で残されていることに気付くことができるようにする。 	<p>イ②</p> <p>イ②</p>
<p>11</p>	<p>・おん祭の参加者を増やす方法について話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・おん祭の参加者を増やしたいという北野さんの思いを想起する。 ・例として、次のことが考えられる。 <ul style="list-style-type: none"> ・おん祭への参加意欲を、学習の前後で比較させる。 ・意欲が高まっている理由を尋ね、その理由をかけた掲示物を作成し、校内に掲示したり、校内放送で参加を呼び掛けたりする。 ・うちの人におん祭の良さをアピールする。 	<p>ウ②</p>

単元の構造図



(6) 考察

第10時を本時として授業を公開した。授業後の研究協議において中心的な話題となったのは、児童が関心を持って話し合い活動に参加していた、ということであった。「2つの祭りの、目に見えない共通点は何か」という、大人ですら考えづらい問いであったにも関わらず、児童は諦めることなく粘り強く学習に取り組んでいたことが印象的であったと、複数の研究協議の参加者は述べていた。そこで、社会科の小単元後半における、これまで学習した知識を活用する授業において、児童が関心をもって学習に臨んでいた点について3点の考察を加えたい。

1点目は、第10時を見据え、その時間の話し合い活動の際に話し合いが活発になるよう、第1時から第9時までを設計した点である。小単元後半において2つの祭りを比較する学習活動を組み入れることは、本小単元の学習に入る前に構想していた。そこで、第5時のおん祭について、第8時の都跡ふれあい祭りについて、それぞれまとめる時間には、①おん祭の新発見、②おん祭が始まった理由、③おん祭に込められた人々の願い、④おん祭を残している方の思い、⑤おん祭を受け継いでいくための工夫や努力、という5つの観点を設定し、その観点通りにまとめさせることにした。そうすることで、相違点を考える第9時や、目に見えない共通点を考える第10時の話し合い活動が活発になったのだと考える。また、まとめる際の5つの観点についても、第1時が始まる前に構想していたため、2名のゲストティーチャーにも伝えることができ、効果的な学習となった。

このことは、「通常、カリキュラムについては、順番に何を教えていくかという積み上げの発想で捉えられがちである。しかし、『逆向き設計』論は、たとえば学年末や卒業時に一体、何を身につけておいてほしいだろうかという教育の成果から逆向きに発想することが主張されている」という「逆向き設計」論に基づくものである。

2点目は、児童にとって本小単元の学びが、目的ではなく、手段となったことである。

稲垣ら(1989)は『人はいかに学ぶか』において、『学ぶ』とか『学習』とかの言葉を聞くと(略)あまり明るいイメージでないことは確かである。」と述べたうえで、「(幼児の言語獲得や、料理の上達は)『学ぶ』こと自体を目標として努力している、という意識もない。相手と意思を通じあいたい、おいしくて栄養のあるものを食べたい、というのが目標で、これをなんとか実現しようとしているうちに、結果として学習が成立していた、ということが普通だろう」と述べている。つまり、学習することが目的となってしまうと、学習に対する意欲は湧きづらいが、学習することが目的を達成するための手段であれば、自ら進んで学習に取り組む、ということである。

本実践においては、第1時に単元を貫く学習問題を設定し、第2時から第4時ではその学習問題の解決を図った。これまでの学びを活用し、第6時と第7時では、児童にとって最も身近な祭りについて調べた。第9時と第10時の学習は2つの祭りの比較である。全ての時間において、教師は一方的に知識を詰め込むことはなく、児童と共に問いを設定したり、問いを投げかけたりすることで、児童は「勉強させられている」と思うことなく、問いの解決に向けて意欲的に取り組んだのだと考える。

このことは例えば、第6時終了時に振り返りで書いた「今日はふれあいまつりのことをしりたかったです。山方先生早くおしえてください。」「みあとふれあいまつりは、なんのためにやりはじめたかきになってきました。」「おんまつりのことを知れたのですっきりしたと思えば、つぎに都跡ふれあいまつりでまた気になることがふえて金曜日が楽しみです。」「みんながふしぎに思うことを言って、もっと、調べたくまりました。」「ふれあいまつりはどんなひみつがあるのかたのしみです。」「ふれあいまつりもおん祭みたいにかい意味がありそうで、もっとふれあいまつりのことを知りたいです。」「ふれあいまつりは、いつから始まったのかが、知りたいです。」「家族に教えてもらって、いっぱい書いてきます。」「お

ん祭がふれあいまつりになってびっくりしたしふれあいまつりは、行ったことがあるのでてっぺいてきにしらべたいです。」という9名の児童の記述に表れている。つまり、児童にとっての目的は学ぶことではなく、学習問題や教師による問いを解決することになったのだと考える。

3点目は、児童にとっては問題單元となるように、教材や資料、単元の構成を配慮したことである。森分孝治・片上宗二編『社会科 重要用語の基礎知識 300』にある「教材單元」の項には、社会科の2つの單元についての記述がある。つまり、問題單元と教材單元である。前者は、子どもの生活や経験の中から学習問題が成立することが出発点であり、子ども自らが、その答を探っていく單元である。後者は、獲得させたい知識を教師が先にもっており、それに対応した学習問題を子どもが導き、その学習問題を探求して知識に到達できるように單元を構成する、という單元である。児童にとっては当然、前者の方が関心を持って授業に臨みやすい。しかし、学習指導要領があり、教科書があるため、社会科で扱う全ての單元が教材單元というわけでない。そこで本実践では、教材單元ではあるが、児童にとっては問題單元となるよう、生活や経験にから学びがスタートするよう、教材や資料、単元の構成に配慮した。そうすることで、児童は意欲的に学習に取り組んだものと考えられる。

以上のような学びの中で、年中行事の見方・考え方を転用できた児童もいた。本実践は11月から12月にかけて実施した。3学期、1月からの総合的な学習の時間では、地域にある年中行事を調べる学習をした。その際、昔から続く年中行事を調べていく中で、「次代に継承していく」という言葉に出合ったときに、「おん祭と一緒だ」と述べていた児童が複数いた。祭りを含む年中行事の見方・考え方を転用でき、その定着が見ることができた事例であるといえる。

今後とも、小単元の後半まで見通した状態で小單元を設計し、問題解決的学習を取り入れることで学び自体が目的とならぬようにし、児童にとっては問題單元となるよう教材や資料、単元の構成に配慮することで、関心を持って、粘り強く考えられる児童の育成に努めたい。

【参考文献】

稲垣佳世子・波多野誼余夫（1989）、『人はいかに学ぶか』、中公新書

西岡加名恵（2008）、『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』、明治図書

森分孝治・片上宗二編（2000）、『社会科 重要用語の基礎知識 300』、明治図書